

+ 「十勝」映像事例解説

1. 東洋農機

【背景】

農機具を製造する大企業は、大量生産を旨としているので、規格品の農機具しか製造せず、トラクターに接続して用いる作業機製造には力を入れない。しかし、十勝農業の主流をなす畑作の場合、作物の種類に応じた多様な作業機が必要である。農業の振興のためには、十勝の農業実態に合致した作業機の製造・供給が不可欠である。

「**リスク**」(=農業振興に不可欠な機具の欠乏)

【目的】

十勝地域の農業者の要求 (needs) に合致する作業機を製造することで地域産業の発展を実現させ、同時に自社の業績を向上させる。

「新結合 (＝在来の機械に新しい機具を接合する) →新しい商品の誕生」

「**地域主義**」「**小実業性**」「**経済性**」

【内容】

農業者との間に良好なコミュニケーション関係を構築し、相互提案を行いつつ、協働して必要な作業機を製造・供給する。

「**コミュニケーション**」「**協働**」

各社員が、自分の業務内容を理解し、創造的に業務に取り組んでいる。

「**非匿名性**」「**再帰性**」「**達成感**」

【成果】

地域の農業者からの信頼を獲得し、業績を伸展させている。地元に着しながらも、九州地域に、また中国にも販路を拡大している。

「**経済効果**」

【課題】

2. 想いやりファーム

【背景】

大量生産・大量消費型の十勝農業のあり方は、日本社会の「食」を支えてはいるが、同時に農産品の質の問題を生み出している。この状況は、農業の作業面だけに関心が向かい、「命との関連」という農業の根本への意識が希薄化していることに起因している。

「リスク」(＝農業の理念の希薄化)

【目的】

大規模農業という地域環境の中で、1つの選択肢として基本に立ち返った農業を実践する。

資本主義の時代状況下で「近代以前」的志向の持続可能性を追求する。

「再帰性」「価値合理性」

【内容】

近代精神とは一線を画した経営理念の下で、「生乳」を生産・販売する。

農業と女性の相性の良さを認識し、かつ、女性の力量を認め活躍の場を設ける。

(上記2点を「新結合」と捉えることも可能)

自分以外の農業経営方針との共存を図り、地域社会の一員という自覚をもつ。

事業が持続することを目指す。

「非営利至上主義」「小実業性」「非匿名性」「地域主義」

【成果】

社会的認知度が高まる：「生乳」の良さを認識が徐々に拡大し、事業の収支関係が正常化する。

「社会的認知」「経済効果」

【課題】

3. 道立十勝圏食品加工技術センター

【背景】

十勝地域は、農・水産業の第一次産品は質量共に豊富だが、業者が加工する（付加価値をつける）技術を十分に備えていない。

「損失＝地域の利点が活かされない（顕在化した**リスク**）」

【目的】

十勝地域の豊富な資源を活用した食品工業の振興のために、食品加工技術の支援ならびにマーケティングの指導を行う。

【内容】

産官学民の連携の一翼を担う：十勝地域の生産者や流通業者に対して、食品加工技術の指導に留まらず、ビジネスの仲介も行う。また、加工技術開発の面で帯広畜産大学との共同研究を行う。

「新しい**集団**形成（＝新結合と解することも可能）」

「**小実業性**」「**地域主義**」「**非営利至上主義**」「**非匿名性**」

センター開発商品の一例が「鮭節」

「新結合（＝廃棄物と商品を結びつける）→新しい商品の開発」

【成果】

十勝地域の利点を活かした新しい産品が市場に供給される。

「**経済効果**」

地域の生産者や流通業者の中で創意工夫の気運が高まる。

「**事業意欲の向上**（＝**経済的活性化**）」

【課題】

4. 帯広畜産大学地域共同研究センター（谷昌幸准教授と農業者・中藪俊秀氏）

【背景】

大学が培った「知」を地域社会に還元することが、社会から要請されている。社会との連携が大学存続の重要な条件の1つとなっている。

「**リスク**」（=知の拠点である大学と社会の遊離現象）

【目的】

大学が蓄積した知見の、社会的な有効活用：農業経営者による、大学が蓄積した知見の活用を可能にする。 「**新結合**」

【内容】

大学が蓄積した知見を社会に提供することで、産官学の連携を実現させる。

「**小実業性**」「**非営利至上主義**」「**非匿名性**」

農業者が抱える問題解決のために、知見を生かして序言を与える。「**新しい集団形成**」
農業者である中藪氏は、みずからを「**経済人**」と称する。

「**経営（合理性）を重視する農業者**」

（ドイツ語で「**農業**」は"Landwirtschaft=Land [土地]+Wirtschaft [経済]）

十勝地域の農業インフラ（たとえば土壌）改良のために、農業者と協働し（農業者によるサンプル土壌の提供）、研究成果を実践面に生かす。

「**地域主義**」「**知見の提供**」（=科学的合理性の実践）

【成果】

土壌研究の知見の提供により土壌の健全化が実現し、農薬使用量の減少が実現した。

「**環境保護**」「**経済効果**」

普遍的な効果が期待できる学問的成果が生まれた。

【課題】

5. 帯広まちなか歩行者天国

【背景】

大型スーパーの、中心市街地からの撤退と都市郊外への出店により、まちの中心であるべき中心市街地が空洞化し、活性が失われている。

「**リスク**」(＝グローバリズムによるローカリティの浸食)

「経済合理性(＝目的合理性)」

広小路商店街の青年商店主たちが、活性化の取り組み開始を要請する。

「当事者の**リスク**認識と危機意識」「価値の共有」「**地域主義**」

【目的】

まちの中に交流の場を作り人を呼び込むことで、賑わいを作り出し、中心市街地再活性化のきっかけにする。

「交流：活性化の第2次元」

【内容】

6月下旬から9月上旬まで、毎週日曜日に、市内中心街で歩行者天国を実施する。

出店やイベントの場を備えた歩行者天国が広場の機能をもつことを目指す。

十勝地域に関する情報を集積させ、来訪者の提供する。

「新結合」

青年商店主という取り組みの核をもちながら、同時に参加希望者に対しては広く門戸を開く。

「結束性に則った開放性」

主催者側も楽しみながら実行できる取り組みにする。

「快感覚」「遊戯性」

取り組みを通じて人材養成を行うことも心がける。

「**小実業性**」「**非営利至上主義**」「**非匿名性**」

【成果】

取り組み参加者の中にコミュニティ意識・連帯意識が生まれる。

【課題】

6. 紫竹ガーデン・紫竹昭葉氏

【背景】

夫に先立たれて、生きる糧と目標を失った。 「人生の空洞化という **リスク**」

都市近郊が開発されて、野生の花が咲き乱れるという光景が失われた。

「環境破壊の **リスク**」

【目的】

「野生の花」という自分の好きなものに関わる生活をする事で、残りの人生を充実させる。

失われた良好な環境の回復に助力する。

【内容】

都市郊外に「野生の花」に満ちた、「紫竹」の名をつけた大庭園を造る。

「人工的な、自然の回復」「新結合」「**地域主義**」「**非匿名性**」

適正と思われる入園料を設定して、庭園を開放する。

庭園内に自然食レストランをおく。

野生の原料を用いた衣料品の製作を実演し、販売する。

「経済性」「**小実業性**」「**非営利至上主義**」

紫竹氏は、遊戯感覚で来訪者を接遇する。彼女自身も来訪者と一緒に、庭園内散策を楽しむ。経営面は、娘の隈本和葉氏が中心となって支える。

「快感覚」「経済合理性の上に構築された遊戯性」

【成果】

知名度が上がり、来訪客が増加する。海外からの観光客の来訪。

【課題】

7. 大草原の小さな家・中野一成氏

【背景】

農産品輸入自由化による、農業経営の危機で、従来の方法による農業経営が行き詰まる。
「農業経営の**危機** (=現実化した**リスク**)」

【目的】

本業である農業の特質を活用しつつ、時代にあった新しい事業を成立させる。

【内容】

資金繰りがままならないので、自力でレストランとコテージを建てる。 「**自立性**」
自家製の農産品を生かした料理を提供するファームイン・レストランを運営する。

「**小実業性**」「**地域主義**」

固定客を重視する立場から、旅行業者への仲介依頼を止める。

「**非匿名性**」「**非営利至上主義**」

2009年に息子の中野心悟氏がスイーツの店を開店する。中野氏がコテージ、弟の中野旭氏がレストラン、息子がスイーツ、という担当業務の分担を行い、各業務を独立採算制にする。

「**集団内**の合理的配置」

弟の中野旭氏は、省力と肉の味の向上を目指して、豚の放牧を始めた。 「**新結合**」

【成果】

人々の支持を受け、一定の繁盛度を保っている。

【課題】